



深い悩みを経て実感する、 土木の懐の深さと面白さ

「取材協力者」 羽鳥 剛史氏 正会員 愛媛大学大学院理工学研究科生産環境工学専攻 准教授



羽鳥 剛史氏
HATORI Tsuyoshi

1980年生まれ。2002年京都大学工学部地球工学科卒業。2006年同大学院工学研究科博士課程修了(都市社会工学専攻)、博士(工学)。2006年東京工業大学理工学研究科助手に着任。同助教、Australia National University客員研究員、早稲田大学招聘研究員を経て2011年より現職。2014年度土木学会論文奨励賞(第IV部門)受賞(受賞論文:羽鳥剛史・小林潔司・鄭蝦榮、「討議理論と公的討論の規範的評価」、土木学会論文集D3, Vol.69, No.2, pp.101-120, 2013.)。

土木の研究の面白さって何だろう、そもそも「土木の研究」って何だろう。学生企画の新連載「やっぱり面白い!土木の研究」は、2014年度論文奨励賞を受賞された若手研究者を訪ね、この問いに対するヒントを模索する。第1回は、第IV部門(土木計画)の受賞者である羽鳥剛史先生に、これまでの研究生生活や今後の研究内容について何うととも、土木研究の魅力を語っていただいた。今後の研究生生活に期待と不安を抱くみなさん、土木の研究の面白さを再発見しに行きましょう。

——土木の研究者になられた経緯を教えてください。

羽鳥——僕は大学からずっと土木工学の分野に所属していますが、大学に進学した時点では土木に特別強い関心があったわけではなかったんです。学科のパンフレットを見て「なんか面白そう」と思った程度で、むしろ文化人類学や政治学といった他の分野にも興味があったので、進学後も文系の授業をたくさん受講していました。

4回生の研究室配属では、恩師である小林潔司先生が経済学をベースに幅広く土木計画学の研究を進めておられることを知り、この研究室で人間の行動や社会の成り立ちについて学んでみたいと思い、小林先生の研究室を選びました。そこで今回奨励賞をいただいた研究テーマである、社会基盤整備に関わる合意形成についての研究を始めたんですね。最初は、「人は誰の言うことを信用するのか」という

信頼の問題について経済学のゲーム理論の観点から研究に取り組みましたが、初めは結果が出なくてずっと悩んでいました。ただ、研究は面白いと感じていて、修士課程に入り研究室の仲間が就職活動を始めた時期にも自分はモデル分析や論文執筆に取り組んでいました。そうした中で、気が付いたら博士課程へ進学するような状況だった。というのが、今振り返ってみると正直な感想です。だから、研究者の道を選んだことに関しては、さほど大きな決断をしたような記憶はないんです。研究室での日々の生活や小林先生から指導を仰ぐ中で少しずつ決断をしながら自分の中で方向が固まっていったんだと思います。

——どういう瞬間に「研究は面白い」と感じていましたか。

羽鳥——学生時代も今も、研究活動の中で悩む時と面白いと思う時を比べたら圧倒的に前者が多いように思います。ただ、悩んだ末に立てるべき「問い」のようなものがおぼろげながら見つかって、さらに自分の中で反芻し、周囲の人たちと議論する中で、その問いに対する確信がじわじわと強まってくる。研究が前に進み出したときに面白く感じます。土木工学の中でも特に計画系の分野は、自然科学的ないわゆる「発見」のようなものが必ずしもあるわけではないので、そういう時が醍醐味ではないでしょうか。

——その悩む時間は、どのように乗り越えていらつしゃいますか。

羽鳥——ひたすら悩むだけかな(笑)。そもそも「何が問題なのか」、「どのように問いを立てるか」が悩ましい問題



写真1 取材風景

で、徹夜して考えることもありまし
た。そんな中、たまたま読んだ文献や
人との会話がきっかけで、何かを思い
ついて道が開けることもありますね。
僕は現場経験があまりなかったので、
いつも本や論文、人との議論を踏まえ
て課題やその答えを考えていたように
思います。

学生の頃、同じ小林研に博士課程の
先輩がいて、その先輩方もそれぞれに
悩みながら研究を進めておられまし
た。日頃からそういう姿を見ていて、
悩んでいるのは自分だけじゃないと感
じて励みにもなりましたし、真剣に悩
みながら研究に取り組むことの大切さ
を自分なりに学んだようにも思いま
す。最近では、大学の講義や学生との
議論、あるいは地元の仕事に携わる機
会が少しずつ増えてきて、そこから研

究を進めるためのヒントをもらうこと
もあります。

——奨励賞を受賞された論文の研究
課題は、どのように見いだされたので
しょうか。

羽鳥——今、パブリックインボルブメ
ントや住民参加をはじめ、公共事業を
実施する上で、さまざまな立場の人の
とが話し合いを行う機会が増えていま
すよね。その一方で、そもそも「ある
べき話し合いとは何なのか」という問
題については、しっかりとした考え方
が確立されていないように思います。
こうした現状に対して、話し合いのた
めの規範、つまり「あるべき論」を考
えられないかというのが最初の問題意
識です。実は、こうした問題は従来か
ら政治学などの分野で議論されてきた
ことなんです。そういった分野の文献
を読む中で、土木に対するヒントも少
なくないと思い、今回の論文を取りま
とめました。

——この論文を経て、現在、関心があ
る研究テーマについて教えていただけ
ますか。

羽鳥——関連して考えているテーマ
は三つほどあります。

この論文では、公的討論、要するに

公共問題に関わる話し合いを評価
するためのフレームワークを提案
しました。ただ、非常に抽象的な
内容で、実際の話し合いを評価す
るとなるとまだまだ相当な距離が
あります。まず一つ目に、その間
をつなぐような研究ができればと
思っています。二つ目は、結局多
数派の意見ですべてが決まるよう
な意思決定の仕方になってしまわ
ないために、公的討論のガバナ
ンスはどうあるべきか、という制度
設計に関わる問題です。三つ目は

心理学的なテーマです。こういう話し
合いの場では、議論をぶち壊そうとす
る人がたった一人でもいるだけで、円
滑な話し合いができなくなります。そ
のような人間の心理や態度を緻密に見
た上で、そういう人が現れたときにど
のように話し合いを進めるべきかを考
えたいと思っています。

——最後に、土木の研究の面白さはど
ういうところにあると思われますか。

羽鳥——これまでの研究活動を振り
返ると、自分自身が未熟ながらも心理
学や経済学、さらに哲学に関わる研究
に携わることができているのも土木の
分野に所属していたからこそだし、世



写真2 小学校での環境教育の様子

の中のために役に立つこと、社会の基
盤をつくること、ということさえ忘れ
なければどんな研究でも受け入れてく
れるような懐の深さが、土木という学
問にはあると思います。

その「深さ」の背景には、地域の現
場の問題と結びついているということ
があるんだろうけど、現場で起こって
いる問題なんてそう簡単に解決できる
わけがないですよ。そういう悩みを
若いうちから経験できるのは素晴らしい
ことかなと思います。そこが、土木
研究の大変さでもあり、面白さでもあ
るのではないのでしょうか。

(担当編集委員：大平悠季、山下優輔)